

日本語とセルビア語の過去形の対照研究¹

トリチコヴィッチ・ディヴナ (ベオグラード大学)
divna.trickovic@gmail.com

【要約】

この論文では、日本語とセルビア語の過去の表し方の違いと類似点を追究し、過去時制においてセルビア語話者が日本語を学ぶ際に遭遇する潜在的な問題点を明らかにすることを目的としている。この二つの言語の時制体系の枠を把握するため、日本語の文法書などの文献及び、日本語とセルビア語双方への翻訳文学からの例を使用し、比較した。その結果、セルビア語の過去形は多様で複雑な動詞パラダイムの中にあり、日本語の比較的単純な時制体系との間に顕著な違いが存在することが明らかになった。この差異が翻訳や言語学習における困難を引き起こしていることから、より多くの練習と理解が求められると考える。

1. はじめに

言語的な観点から見ると、「時間」は過去から未来へと進行する動作、出来事、または状態の流れとして捉えられる。現在の発話時点を基点として、この流れは過去、現在、未来の三つに分けられる。言語には様々な時間を表す表現が存在するが、本稿では時間の文法的表現、特に過去の表現に焦点を当てる。具体的には、セルビア語の動詞パラダイムの時制と、動詞に加えて形容詞も時間の変化を示す日本語の時制体系を比較検討する。また、本稿では研究対象を主節の述語の時間区分に限定し、従属節は考慮しないこととする。さらに、「過去形」とは、両言語において過去の動作または状態を表す特定の述語形式で表現されるものを意味する。

時制とともに、アスペクトという問題も浮かび上がる。アスペクトは動詞内の時間を表す概念であり、言語学においては多角的に研究されている。概して、アスペクトは動作の本質とその捉え方に関する情報を提供する。それが一定期間を要するプロセスを示唆しているものか、または変化の発生そのものが重要であり、そのためにどれだけの時間がかかったかは考慮されないものかが主な違いになっている。セルビア語では、アスペクトは動詞の基本的な意味にかかわっており、日本語の自動詞と他動詞のペアのように動詞の分類に影響を与える。セルビア語では動詞はアスペクトに基づいて完了動詞と不完了動詞に分けられる。スラブ語族ではアスペクトの体系は語彙の分野であるのに対し、日本語を含む他の多くの言語では、アスペクトやアスペクト的な意味は使用される文脈や述語形式との関連で主に見られ、特定の要素にのみ関連付けられるわけではない。

¹ 本論文は、2009年にベオグラード大学で提出し審査を受けた著者の博士論文「セルビア語と日本語における文法カテゴリーとしての時制」(Tričković 2009)を基にしている。本稿では、上記博士論文で使用した参考文献を参照し、その中から多くの例を引用しているが、本稿は博士論文の一部ではなく、新たに執筆されたものである。また、本稿のテーマは日本語教育であるため、セルビア語に関する参考文献の紹介は最小限にとどめている。日本語のテンスおよびアスペクトに関する参考文献は博士論文にはさらに多く存在するが、本稿では例文が引用されたものにほぼ限定している。

本稿では、まず日本語とセルビア語のそれぞれの時制についての特徴を紹介してから、文法書などの文献からの例、また文学からの例を比較しながら、過去の表し方に焦点を当てて、日本語の時制をセルビア語の視点から考察してみる。セルビア語、日本語間の対照研究がまだ少ないこの分野で、本稿が過去の表し方の基礎研究のひとつとなることを期待する。

2. 日本語の時制の基本

日本語における述語パラダイムでは時間を三つではなく二つの区分に分けて語られることが多い。この区分では現在と未来のテンスは同じ形式で表され、「非過去時制」と総称される。一方、「過去時制」は動詞や形容詞の特定の形で「非過去時制」とは一貫して明確に区別される。

本稿における日本語の時制形式の分類として、接尾語に基づいて名付けられた二つのペアの形式、「スル形」と「シタ形」、及び「シテイル形」と「シテイタ形」を用いる。これらの形式の特徴は、否定形や文体スタイルなど多様な変化も含まれているが、時間的意味にはそれが影響しないことだ（例えば、スル形は「書く」「書きます」「書きたい」「書かない」「書かれる」「書けない」などの形式に対応する）。

現代の日本語教科書では、述語を動的と静的に分け、動的な述語は動的動詞から得られることだけに触れている。この論文では、日本語のアスペクトとアスペクト的意味の関係についての詳細は省略するが、動的動詞は主に動作（継続動詞）や変化（瞬間動詞）をシテイル形で示すアスペクトの意味で分けられるのである。シテイル形の継続動詞は進行中のプロセスを表し、瞬間動詞の同形は何らかの変化の後に続く状態、すなわち結果的意味を表す²。

一方、静的述語には名詞句や形容詞句を含む述語や静的動詞、動的動詞の特定の形式（例えば、否定の「シナイ形」や希望の「タイ形」など）が含まれる。

状態に関しては、日本語とセルビア語の言語学史上、アスペクトよりも時間に関連付けられている（寺村 1999 など）。日本語では、これがスル形とシタ形の対立によって表される。スル形とシタ形のアスペクトについては、まとまった動作として捉えられ、より細かいプロセスに分けられない全体的な動作として理解されている。これはセルビア語の完了動詞の概念を思い起こさせる³。しかし、この問題は実践的なものよりも理論的な問題であるため、この論文ではスル形とシタ形のアスペクトの意味や他の静的述語の問題には深入りしない⁴。

² これに加えて、シタ形は完了、完成を意味するなど、他のアスペクト的意味もあるが、しばしば過去時制の意味と同一視され、言語教育では特に重点を置く必要がないと思う。（金水他 2003 など）

³ 以前は、セルビア語の完了動詞の動作の瞬間性について詳細に検討されていたが（Stanojčić & Popović 1992 等）、現在はその動作における瞬間性より、一つのまとまった全体としての動作・できごととして認識されるべきというのが共通認識と言われるようになった。この観点から、セルビア語の完了動詞も、その動詞が表すプロセスをより細かくわけない一つのまとまりとしてとらえていると見なされる（Ridanović 1985）。

⁴ 日本語にはいわゆる形容詞的な動詞の用法もある。これはシテイル形をはじめ動詞が主体の特性を表現することが多い。それに、反復的な意味—つまり動作の繰り返しを示す用法もある。この反復性は何かの習慣となりえる。（砂川 1999 等）これらの用法については、時間区分の意味が述語形式より文脈に関連しているため、この論文では扱わないこととする。

3. セルビア語の時制パラダイムの基本

セルビア語の時制パラダイムにおける日本語との比較では、主に二つの違いが存在する。第一に、セルビア語の動詞形式は3つの人称と、単複の区別によって変化する。第二に、セルビア語の動詞はアスペクトに基づいて完了動詞と不完了動詞に分けられ、この区分が時制の形成に影響を与える。特定の時制は完了か不完了のうち特定の動詞のアスペクトからのみ形成されることもある。

例：

不完了動詞：

1. Sedeti : 座っている (意味：座った状態にどのように入ったかには焦点を当てず、現在座ったままの状態が続いていることを表す。時間の流れを示唆する動作を意味する。)
2. Pisati : 書いている (現在行われている書くという動作を示す。進行形の意味を持ち、今まさに実施されている動作を指す。)

完了動詞：

1. Sesti : 座る (意味：変化に焦点を当て、立っている状態から座るという動作が完了したことを示す。進行性はなく、瞬間的な動作を表す。)
2. Napisati : 書き終わる (意味：書いていない状態から書き終わった状態への変化を表す。動作の完了を示し、全体を一つのまとまりとして捉える。)

セルビア語における過去の意味を含む時制の形式を以下の表で示す。

表1：セルビア語における過去に関する時制パラダイム

セルビア語の用語	用語の日本語訳	その特徴
Prezent (プレゼント)	現在形 (動作動詞のシテイル形に該当する)	現在の意味なら不完了動詞のみ 物語文脈で過去の意味で使われる場合、完了動詞でも可能 *直接の経験のニュアンスあり
Futur (フトウル)	未来形	完了・不完了両方可能 物語文脈で過去の意味で使われうる
Perfekat (ペルフエカト)	過去形	完了・不完了両方可能
Aorist (アオリスト)	完了過去形	完了動詞のみ *直接の経験のニュアンスあり
Imperfekat (インペルフエカト)	未完了過去形	不完了動詞のみ 進行過去の意味を持つ
Pluskvamperfekat (プルクヴァムペフェカ)	大過去形, または過去完了形	完了・不完了両方可能 過去形より古い過去を意味する

*セルビア語の時制に関する日本語の文献は少ないため、ここでの翻訳は執筆者の提案に過ぎない。そのため、セルビア語の発音もカタカナで表記している。また、セルビア語文法で通常、時制には含まれない Futur II (第二未来形, すなわち未来完了形) や Potencijal (可能形) なども存在するが、ここでは時制として扱わないものは除外する。

見ての通り、過去は時制体系において最も多くの形式で示されている。主に過去の動作や出来事のみについての形式である過去形, 完了過去形, 未完了過去形, 大過去形 (過去完了形) の四つの時制に

加えて、現在形と未来形も物語において相対的に使用され⁵、過去の動作を記述するのに用いられる。インペルフェクト（未完了過去形）は現在では慣用句以外ではあまり使われまいが、アオリスト（完了過去形）とプルスクワムペルフェクト（大過去形）は、より単純で一般的なペルフェクト（過去形）にしばしば置き換えられることがある。しかし、アオリストは個人的な経験と表現のダイナミックを通じて存在している。また、アオリストの他にプレゼント（現在形）は他の時制よりも個人的で直接的な経験を表す意味合いを持ち、過去のできごとを語る時（物語性）において動作のダイナミックを強調することがある。そして、プルスクワムペルフェクト（大過去形）はペルフェクト（過去形）よりも古い過去を示し、事実の現実性の喪失を表す非現実化の用法を通じてその位置づけが保たれている（Ivić 1958, 1980）。

セルビア言語学において非現実化は、特に過去形に関連して、何らかの状態や動作が無効になり、現実性を失ったことを意味する用語である。日本語の文法では、この非現実性は何らかの結果の持続が終了したこと、たとえばある状態が終わったことと結びつけられ、過去または否定の形と同一視されることが多いが、日本語学でも非現実化の概念を考慮してみればよいのではないかと思う。この非現実性の概念は、「有効期限の終了」という意味で日本語でも過去時制を用いて表現されることがある。例えば、「祖父は漁師だ」という文を過去形にすると「祖父は漁師だった」となり、この文の成分にある存在が終了したこと、つまり、もはや「祖父ではなくなった」か「祖父は亡くなってこの世にいない」か、それとももはや「漁師ではなくなった」、「今パン屋になった」などということが暗示され、想起されうる。この意味は日本語の完了の概念に近いが、過去と現在の間の連続性の断絶に関する情報により強い焦点を当てていると思う。

セルビア語の動詞パラダイムには、モダリティを表す形式も存在し、それが時間を表現するために使用されることもある。例えば、可能形や第二未来形（未来完了形）があるが、ここでは可能形が過去に繰り返される行動、ある期間や主体の特徴として、日本語の過去形の習慣的な意味に対応させる手段として重要であるということを言及するのみにとどめる。

4. 日本語とセルビア語における過去の時制の対照

ここからは、日本語の四つの時制形式を取り上げ、セルビア語で過去を表現する時制と比較していく。

4.1 スル形

スル形は通常、過去を表現するものではないが、現在が直接的に過去と関連する文脈においては、過

⁵ セルビア語学では、発話時点に対して定義される絶対的時制の用法と、発話時の時間以外の別の参照点、設定時に基づく相対的時制の用法が区別される。相対的用法については、特にプレゼント（現在形）が語りに使用される文脈や、理解に二つの時点が必要なプルスクワムペルフェクト（大過去形）の定義で後述するが、それ以外の場合はここでは触れない。また、いわゆる形容詞的特性を持つ用法も存在する。この用法は主語の属性について述べるもので、動作が絶対的な使用の場合ほどダイナミックには感じられない。慣用的な使用やことわざでの特定の使用、また反復性の意味の使用は、文脈や具体的な構文的使用に結びつけられるため、本論文ではこれらの特異性を扱わない。（Stevanović 1967, Ivić 1958, 1995 など参照）

去の意味を持つことがある。この用法はセルビア語の現在形にも当たる。以下の例⁶でこの点を示す。

- 1) 「2, 3日前から体のぐあいが変わるい。」 Ne osećam se dobro (još) od pre dva, tri dana. (砂川 1999: 4)

また、スル形は物語の中でより大きなダイナミックを実現するために使用される。しかし、セルビア語の現在形も同様の方法で使用することが可能だが、完全には日本語の用法と一致しない。翻訳文学からの例を見ると、日本語の物語性スル形の使用法が、セルビア語で過去に繰り返される動作を表すアオリストや可能形に相当する場合がある。

- 2) 「弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひっかけて口をぴったり覆い、それからまた上になった頬を包んで、一種の頬かむりのような工合だが、ゆるんで来たり、鼻にかぶさって来たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやっていた。」 (『雪国』, p. 9)

Suprotno slabašnosti njihovih tela, oboje je odavalo sliku prijatne skladnosti. Jedan kraj šala služio je muškarcu kao jastučić za glavu, a drugi, malo izgužvan, pokrivaio mu je usta i obraze. Maramica se uskoro odreši, šal skliznu preko nosa, a on i ne trepnu okom. Devojka mu ga većtim zahvatom ruke opet popravi. (Snežna zemlja, p. 10)

- 3) Samo s vremena na vreme javio bi se u njemu stari Karađoz, i on bi pred zadivljenom i sujeverno uplašenom Avlijom izvodio neki od svojih velikih podviga, kao pre desetak-petnaest godina. (Prokleta avlija, p. 30)

「ただときたま、彼のなかで昔のカラジョーズがよみがえって、驚愕し、迷信的な恐怖で震える「中庭」の前に現れ、十年前、十五年前と同じように、彼の偉業のうちのどれか一つをふたたびやってみせるのだ。」 (『呪られた中庭』, p. 36)

4.2 シタ形

シタ形は過去の時間における動作・出来事や状態を表現するために使用される。以下の例から見られるように、セルビア語ではシタ形が完了動詞と不完了動詞の両方の過去形に対応することがあるが、不完了動詞の場合はシテイタ形の使用も可能である。以下の例は、寺村 (1999: 115) によるものをロシア語からセルビア語に置き換えたものである：

- a. On je pročitao knjigu. (完了動詞の過去形)「彼は本を読んてしまった」
- b. On je čitao knjigu. (不完了動詞の過去形)「彼は(ある時間)本を読んだ」「彼は(そのとき)本を読んでいた」

つまり、次の例で見えるように、同じ動詞がセルビア語では文脈に応じて完了動詞または不完了動

⁶ 例の中で対照部分を下線で示す。紙面の関係上、他の情報は省く。引用で上に書かれている方が原文で、下が翻訳である。

詞で訳されることがある。そして、シタ形は完了性と結果性の意味に関連付けられる。

- 4) おとといあそこの席に座りました。Prekjuče sam sedela na onom tamo mestu. 不完了動詞の過去形、過去の継続動作の意味
- 5) あそこに座ったんですが、何も見えなかったから、ここに移った。Sela sam tamo, ali kako ništa nisam videla, prebacila sam se ovde. 完了動詞の過去形

これは日本語のシタ形は、文脈に応じてセルビア語の過去を表現するすべての動詞時制形式で訳せうという意味で重要である。しかし、それらの具体的な関係や翻訳における割合は別途研究する必要があるだろう。

また、例5の「移る」という動詞のシタ形に対応するセルビア語の過去形は、過去の動作の結果が続いたあと現在の状態を示すという意味を持つ可能性がある。言い換えれば、この文は、主語が今も「ここにいる」と解釈することもできる。

このようなシタ形の典型的な結果性を持つ用法—過去に行われた変化の影響が現在にも残っているという意味は、心理的または生理的なプロセスに対応する動詞で見られるが、セルビア語にもふさわしい（「驚いた」 *iznenadila sam se*, 「お腹が空いた」 *ogladnela sam*⁷）。このような用法は、日本語学においても、時制よりもアスペクトとして考えられている（金水他 2003）。

セルビア語学ではアスペクトはどうしても動詞の種類の特徴として考えられ、それ以外のことは時制そのものの用法の特別な意味としてとらえている傾向があるが、先も述べたように、結果の否定、つまり過去の動作や変更の影響が無効になったことを表す用法は、セルビア語学において「非現実化」と呼ばれる。過去形の使用は、両言語において非現実化への解釈の可能性をもたらし、日本語のシタ形にも関連している。例えば：

- 6) 「きのうからここにある」: 「きのうからここにあった」 (砂川 1999: 5)
Od juče je ovde : Od juče je bilo ovde.

もし「もうここにはない」場合、つまりその事実がもはや現実ではない場合、両言語で過去形を使用しなければならない。逆に、「まだここにある」場合、この二つの形式（現在形・スル形と過去形・シタ形）は両言語で交替可能だ。

他の多くの言語と同様に、過去形には時間的意味に加えて反事実性の意味も関連づけられるが、他にもしばしばアスペクトに関する意味が含まれる。しかし、これらの意味については本稿の対象とはしない。けれども、シタ形が発話のダイナミックを保持し、話者の視点を過去の出来事から遠ざけさせないという働きに注意を向けたい。例えば、以下のような文がある。

- 7) Velika diplomatska igra oko Džema nastavlja se i biva sve življa. Papa razvija svoju akciju za ostvarenje lige hrišćanskih vladara protiv Turske. U tom krstaškom pohodu Džem treba da odigra važnu ulogu, a

⁷ 「動きの結果状態を表す用法とは、問題の時点以前に動きが終結し、動きの主体にその結果が残存している状態を表す用法のことである。」 (増岡・田窪 2000: 114-115)。寺村 (1999: 119-120)なども参照。

Vatikan je za njega zlatna krletka. Matija Korvin traži Džema za svoj pohod protiv Turske. To isto čini i egipatski sultan, i nudi otkup od šest stotina hiljada dukata, i još šezdeset hiljada od strane Džemove majke. (Prokleta avlija, p. 70)

「ジェムをめぐる大外交戦はつづき、いよいよ激しさを加えていった。法王はトルコに対抗するキリスト教君王たちの同盟を結成する活動を推し進めた。ジェムはこの十字軍において重要な役割を果たすはずの人物であり、彼にとってヴァチカンが黄金の檻だった。マーチャーシュ・コルヴィノスは、自分のトルコ侵攻のためにジェムを要求した。同じようにエジプト国王もジェムを要求し、六十万ドゥカットの身の代金を申し出て、さらにジェムの母が六万ドゥカットをこれに上のせした。」（『呪われた中庭』， p. 84）

これは、セルビア語の物語用の現在形の翻訳としてのシテイル形の使用頻度から考察される。

4.3 シテイル形

シテイル形は、発話の時点と最も直接的な関係を持つ時制形式であり、現在時制に最もあてはまっていると言えるだろう。しかし、シテイル形は瞬間動詞による結果性の意味を通じて過去とも関連付けられる。これを、発話点を基にして過去の出来事が現在に投げかける影のようなものとして表現できるだろう。けれども、セルビア語においては、発話時より前の出来事は普段現在形ではなく過去形で表されなければならないため、学習上の問題点となる。

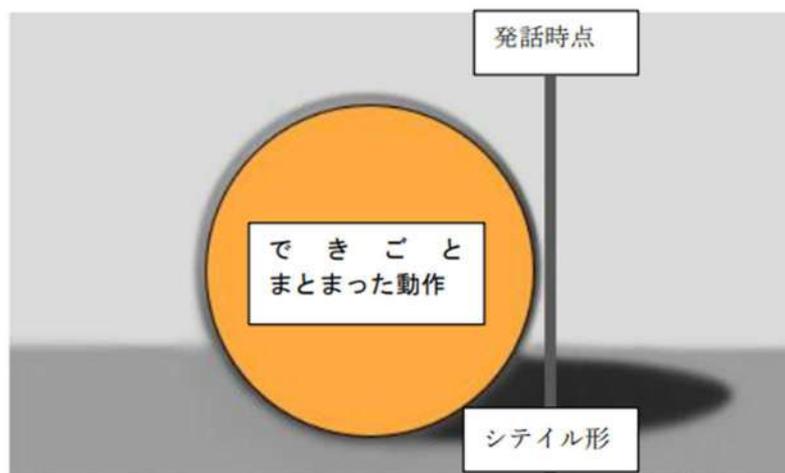


図1：シテイル形の結果的な意味を視覚的に表現したイメージ

すなわち、下の例に見られるように、日本語の結果的意味は、セルビア語での過去形や現在形の受け身で翻訳される（例8）が、例9と例10のような文脈では、過去形のみが使われる。

- 8) 木が倒れている。 Drvo je palo. / Drvo se srušilo. / Drvo je srušeno.
- 9) もう食べたか？ Da li si već jeo? いいえ、まだ食べていない。 Ne, još nisam jeo.
- 10) 田中さんには明日の会議のことを伝えましたか？ いいえ、私は伝えていませんよ。 Da li si preneo Tanaki za sutrašnji sastanak? Ne, ja mu nisam preneo.

なお、「もうしたか」「まだしていない」というパターンは当地の日本語教育において、特に注意が払われているが、例 10 のような「まだ」と「もう」が入っていない文では、セルビア学習者には、より多くの練習に時間を割く必要があるだろう。

さらに、シテイル形が過去の経験を表現する場合にも過去の意味と関連づけられる。これは、過去に一度発生したことが現在にどのように影響を及ぼしているかを示すのに用いられる形式であり、セルビア語ではこれを過去形で表現するため、日本語学習者はこのニュアンスの違いにも追加の指導が必要になる。

- 11) わたしは、十年前に一度ブラジルのこの町を訪れている。だから、この町を知らないわけではない。 Posetila sam ovaj grad u Brazilu jednom pre deset godina. Zato ne može da se kaže da nisam čula za njega. (砂川他 1998: 246)
- 12) 北海道にはもう 3 度行ってる。 Išla sam na Hokaido već tri puta. (砂川他 1998: 246)

このような意味は、過去から現在に持ち越された経験として解釈される。この性質は、継続動詞を用いても表現可能である。

- 13) a. その本を今読んでいます。 Sada čitam tu knjigu 現在の進行性の意味、セルビア語で現在形
b. その本をもう読んでいます。 Tu knjigu sam već pročitao. 以前の経験の意味、セルビア語で過去形 (Alfonso 1980: 891, 増岡・田窪 2000: 115 も参照)

この用法は物語においても見られる。物語の中で登場人物が過去の出来事を現在形で語ることにより、その出来事がダイナミックな影響を与えていることや、登場人物の心情に深く根ざしていることを示すのに役立つ。この用法は、過去と現在の間のつながりを強調し、聴き手に対してより発話時点に近づかせて緊迫感のある物語性を提供している。

- 14) その年、東京には二度大雪が降っている。 „Te godine je u Tokiju 2 puta padao veliki sneg.“ (寺村 1999: 126)

4.4 シテイタ形

シテイタ形の用法の意味について具体的に取り組んでいる研究は比較的少なく、シテイタ形の意味は一般的にシテイル形やシタ形の意味から推測されることが多い。または、シテイタ形はシテイル形の過去形であるとのように説明されているが、以下の例からその立場の理由が少し見て取れる。

- 15) 子供たちはきのう一日中遊んでいました。 Deca su se juče celi dan igrala. 過去の進行相
- 16) 台風が過ぎた後には大きな木が何本も倒れていました。 Pošto je prošao tajfun, nekoliko stabala je ostalo da leži. 過去の完成相 (砂川 1999: 30)
- 17) あの店で飲んだコーヒーにはクリームがたっぷり入っていました。 Kafa koju sam pila u onoj radnji je bila s puno šlaga. 過去の結果相/形容詞的用法 (砂川 1999: 30)
- 18) 「実家へ行く時は、また商売に出るなんて夢にも思わなく、スキイも人にくれて行っちゃった

のに、出来たことと言えば、煙草を止めたただけだわ。」「そうそう、前にはずいぶん吹かしてたね。」(『雪国』, p. 85).

Kad sam bila kod kuće nisam ni u snu mislila da ću još jednom raditi kao gejša. Čak sam i skije već poklonila, ali mi je jedino stvarno uspelo da se odviknem od pušenja.- Zaista? Da, stvarno ranije si mnogo pušila! (Snežna zemlja, p. 72) - 過去の習慣

- 19) 子供のころは体が弱くて病気ばかりしていました。 Kao dete sam bila slaba i stalno sam bila bolesna. 過去の反復相/形容詞的用法 (砂川 1999: 33)
- 20) 日本と大陸はかつてつながっていた。 Nekada se Japan spajao sa kopnom. 過去の形容詞的用法 (普遍的な事実)

これらの例は全部シテイル形であり、セルビア語の過去形で訳されている。

同じく、シテイル形と同様の原則に基づいて、「(ある時) もう～し(ていた)か」という過去に関連する質問に対しては、「していない」の代わりに「していなかった」が使用される。要するに、シテイタ形はその動作・状態が既に終了し、過去の事実として確定している場合に用いられる。その意味でシテイタ形を把握するには、発話時点に対する過去の別の時点が必要だとわかる⁸。

- 21) 「あなたがついたとき、だれかいましたか。」「いいえ、まだだれもきていませんでした。」 Kad si ti (bio) stigao, da li je bilo nekoga? Ne, još niko nije bio došao. (砂川 1999: 11)

例 21 のような場合、シテイタ形には他の過去を表すセルビア語の時制形より大過去形の方が適しているが、上の例に見られるように(単純な)過去形も可能な解決策である。その違いは、過去形の翻訳の場合はその動作の完了相により重点が置かれるが、大過去形の翻訳は次の働きがある: 回答「まだだれもきていなかった」は、それ以降状況が変化し、以前は「誰も来ていなかった」という状況が他の過去の時点で現実ではなくなった(非現実化した)ことを示唆している。つまり、「後で誰かが来た」ことが示唆される場合、セルビア語の大過去形に最も適している表現である。

一方で、次の例文を見ると、シタ形とシテイタ形の違いが明確になる。

- 22) 私が公園に着くと、いつも 5, 6 人の子供たちが遊んでいた(/*遊んだ)。 Kad bih stigao u park, tamo se uvek igralo (PERF. nesvrš.gl.) petoro, šestoro dece. (金水他 2003: 43)
- 23) a. 彼が来たとき、私は友達に手紙を {X 書いた/0 書いていた}。 Kad je on došao, ja sam prijatelju pisala pismo.
- b. 私は 3 時間で手紙を {0 書いた/X 書いていた}。 Napisala sam pismo za 3 sata. (庵・清水)

⁸ このような過去のもう一つの設定時を必要とする時制と言え、セルビア語の大過去形(プルスクワムペルフェカト)に典型的に関連付けられるため、シテイタ形をそれに類似したものとして理解するには十分な理由がある(Сыромятников 1971: 293-299 を参照)。しかし、上の例からわかるようにセルビア語では、シテイタ形は完了動詞の過去形に相当することが多いし、大過去形よりも頻繁に対応しているようである。また、セルビア語への翻訳では、過去における動作や状態の持続を表す完了動詞のインペルフェカト形が予測されるのが論理的だろうが、そのような例はあまり見当たらなかったため、より深い研究が必要だ。

この場合、シタ形とシテイタ形は互いに交替可能ではないが、その差がセルビア語訳では見分らない。このような使用法はセルビア語での不完了動詞の過去形（ペルフェカト）と大過去形にあてはまる。上の例からは、ある動作や状況の時間的枠組みの意味がシテイタ形でのみ表現されるとわかる⁹。その意味はセルビア語の不完了動詞に含まれる。一方、シタ形は動作を完動的に捉えているため、セルビア語の完了動詞に近い（が、同じではない）意味になる。

例えば、次の例では、セルビア語の過去形（ペルフェカト）が2回登場する。日本語の翻訳を見ると、シタ形（太文字で表示）とシテイタ形（下線で表示）の両方に対応しているが、シタ形は一回限りの動作を表し、シテイタ形は以前のある時点から続いている状態を表している。

24) **Džem je izjavio da su ga vitezovi sa Roda prevarili i sve dosad držali u zatvoru.** (Prokleta avlija, p. 70)

「ジェムは、ロードス島の騎士団が彼を欺いて、いままで監禁していたことを訴えた。」（『呪われた中庭』, p. 84）

さらに、物語において、シテイタ形はセルビア語の物語性の用法のプレゼント（例 25）やアオリスト（完了過去形、例 26）に対応することがある。これは、シテイタ形が物語の中で過去の出来事を現在の視点から描く際に使われることがあるためである。

25) **A fra Petar produžuje svoju šetnju niz dvorište, do nekog drugog kruga, pitajući se ima li igde razumna čoveka i razgovora, i tražeći, kao lek što se traži, malo zaborava i rasonode.** (Prokleta avlija, p. 95)

「フラ・ペタルは「中庭」の散策をつづけ、どこかにまともな人間がないものか、まともな会話が聞かれないものかと思いながら、鎮静剤を求める人のように、わずかばかりの忘却と気晴らしを求めながら、人々の輪から輪へと足を運ばせていた。」（『呪われた中庭』, p. 113）

26) **Stajao je jednako u mestu i brisao ostudeneo znoj sa čela. Gledajući sa nesnalaženjem sivu, utabanu zemlju i bele zidove pred sobom kao da ih prvi put vidi, oseti kako mu celim telom ide hladan i tanak talas smrti.** (Prokleta Avlija, p. 89)

「フラ・ペタルはその場に立ちつくし、ひたいににじむ冷たい汗を拭っていた。彼は灰色の踏み固められた土と目の前の白壁を、いま初めて見るかごとく呆然と眺めながら、彼の全身に恐怖の冷たいさざ波が立つのを感じていた。」（『呪われた中庭』, p. 105）

つまり、シテイタ形はすべてのセルビア語にある過去を表す時制形で翻訳されうるにもかかわらず、あまり教科書では項目として取り扱われていないので、より多く練習させる必要があるのではないだろうか。

上記の例から、このような用法がセルビア語では不完了動詞の過去形で翻訳されることがわかるが、より詳細な説明を行うためには、さらに多くの具体的な例に基づいた分析が不可欠である。

⁹ 「両者の違いは、「～した」は動作・出来事を終わったものとしてひとまとまりのものとして扱うのに対し、「～していた」は動作・出来事を終わっていない広がりのあるものとして扱うところにあります。」（庵・清水 2004: 46）

5. 考察と結論

言語が異なれば、時間の流れの区切り方も異なる。日本語の時制形式は、一見単純に見えるが、それらがセルビア語のようにより複雑な時制パラダイムを持つ言語に翻訳される際にどのように現れるかを考察すると、日本語教育においては時制の形式とその違いにもっと注目する必要があることが明らかになるだろう。セルビア語との比較では、物語性のダイナミズムがスル形とシタ形の両方に関連していることが明らかである。シタ形は不完了動詞と完了動詞の過去形に対応可能だが、完結した全体としての解釈に近く、セルビア語の完了動詞により適していることが多い。シテイル形は特に注目される形式で、明確に現在に関連しているものの、結果の意味で過去の一部をも含んでおり、これはセルビア語で過去時制の一形式として表現される。さらに、外国語としての日本語教育においてあまり注意されていないシテイタ形は、シタ形と同じように大過去形にも、不完了動詞の過去形にも、また他の過去を表す時制形にも対応しているため、セルビアの日本語学習者にしばしば不適切な使用が見られるのではないかと思われる。これらの点から、特に外国語と比較した場合、日本語教育において時制に関する問題にもっと焦点を当てる必要があると結論付ける。一つの方法として、過去の出来事を語らせることが、会話練習としてより効果的であると考えられる。

資料

- Andrić, I. (1991) *Prokleta avlija. Sabrana dela, knj. 4.* Beograd: Prosveta.
- Kavabata, Y. (1981) *Snežna zemlja.* (Ljiljana Đurović, Trans.). Beograd: Slovo ljubve.
- アンドリッチ, イヴォ (1995) 『呪われた中庭』 (栗原茂郎, 訳) 恒文社
- 川端 康成 (1971) 『雪国』 新潮

参考文献

- 庵, 功雄., & 清水, 佳子 (2004) 『時間を表す表現—テンス・アスペクト』 スリーエーネットワーク
- 益岡 隆志, 田窪 行則 (2000) 『基礎日本語文法-改定版』 くろしお出版
- 金水 敏, 工藤 真由美 & 沼田善子 (2003) 『時・否定と取り立て (日本語の文法2)』 岩波書店 (初版 2000)
- 砂川有理子 (1999) 『する・した・している』 (日本語文法—セルフ・マスターシリーズ2) くろしお出版 (初版 1986)
- 砂川有理子 (代表) (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
- 寺村 秀夫 (1999) 『日本語のシンタクスと意味』, Vol. 2. くろしお出版 (初版 1984)
- Tričković, D. (2009) *Gramatička kategorija vremena u japanskom jeziku u poređenju sa srpskim.* Filološki fakultet Univerziteta u Beogradu. (neobjavljena doktorska teza) (未発行の博士論文)
- Alfonso, A. (1980). *Japanese Language Patterns, a structural approach, 2.* Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.
- Ivić, M. (1958) *Sistem ličnih glagolskih oblika za obeležavanje vremena u srpskohrvatskom jeziku.* Godišnjak Filozofskog fakulteta u Novom Sadu, 3.
- Ivić, M. (1980) *O značenju srpskohrvatskog pluskvamperfekta.* Zbornik za filologiju i lingvistiku, 23/1. Novi Sad: MS, 93-100.
- Ivić, M. (1995) *Načini na koje slovenski glagol ovremenjuje ponavljaju radnju.* Lingvistički ogledi. Beograd:

Slovograf, 37-55.

- Ridanović, M. (1985) Jezik i njegova struktura. Sarajevo: Svjetlost, Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.
- Stanojčić, Ž., & Popović, L. (1992) Gramatika srpskog jezika, udžbenik za I, II, III i IV razred srednje škole (2 ed.). Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, Novi Sad: Zavod za izdavanje udžbenika.
- Stevanović, M. (1967). Funkcije i značenja glagolskih vremena. SANU posebna izdanja, knjiga CDXXII, odeljenje literature i jezika, knj. 20. Beograd.
- Сыромятников, Н.А. (1971) Система времен в новояпонском языке. Москва : Наука.